

京都の伝統工芸品 「京象嵌」

指先から作品へ込めた職人の想い
見る人、ふれる人を魅了

艶やかな純黒に金や銀の美しい模様が輝く象嵌。

一つの素材に別の素材をはめ込むという技法で、古くは飛鳥時代、大陸シルクロードを経て仏教とともに日本へ伝えられたといわれています。時を経て江戸時代には、京都に優れた象嵌職人が生まれ、日本刀の拵えや甲冑、鏡、文箱や重箱などの装飾に象嵌の技法が用いられていました。

伝統の京象嵌を担う 若き象嵌職人

真剣なまなざしで地金に向かうのは、株式会社中嶋象嵌の3代目、中嶋龍司さん。今は亡き祖父の跡を継ぐ決意をし、象嵌職人を志したのは19歳のときでした。手先が器用だった中嶋さんは、幼いころから祖父の

仕事を興味深く見て育ち、この道に導かれたことは自然な流れでした。

「祖父は、やるなら、真剣にやれ」と言いましたが、こつでないとダメ」とは言わず、いつも前向きな言葉をかけてくれました」と中嶋さん。厳しくも温かな祖父から教わった伝統技術はしっかりと孫に受け継がれています。

**宝石にはない
奥ゆかしい華やかさ**

象嵌とはどのように製作されるのでしょうか。まず鉄の地金の表面全体にタガネを使って布目のような細かな刻みを入れ、純金や純銀の線、平金を模様にあてたものを金槌で丁寧に打ち込んで模様を描いていきます。このとき下絵のない状態で、頭でイメージしたデザインを思い描きながらというから

驚きです。その後、酸化鉄で腐食させ、一旦錆びを出した後、錆止めを行い、漆を塗りながら焼き上げていきます。漆塗りの黒ベースに華やかなデザインを施した金、銀が、凛としたきらびやかさを演出しています。ブローチ、ペンダント、イヤリング、指輪、着物用のかんざしや帯留め、また紳士用のネクタイピンやループタイなどのアクセサリを中心に雑貨など商品の種類は多岐にわたります。



すかしぼり



総嵌



海外で出張販売をすることもあり、「象嵌は、特に古い物を大切にしているヨーロッパの人たちに興味を持たれているようだ」と話す中嶋さん。国内では50代以降の大人世代のお客さまが多いようですが、中嶋さんの提案する新たなデザインは若い人にも響いています。



京象嵌作家 中嶋 龍司氏 Nakajima Ryuji

19歳のころ、祖父から象嵌の技術を習得。修業を重ね、千年以上もの歴史を誇る「象嵌職人」となり、株式会社中嶋象嵌を継承。若手の伝統工芸士としてTVなど多くのメディアでも注目を集めている。

平成19年度、京の若手職人 京もの認定工芸士。



新しい感覚を取り入れ、 世代を越えて愛されるように

京象嵌の特徴でもある「総嵌」と呼ばれる技術は、背景にほとんど隙間がないほどの細かな刻みを加える手法ですが、中嶋さんの作品は寸分の狂いもなく整然と刻まれ、手業とは思えないほど。総嵌の高い技術力もさることながら、デザインにおいてもどこか他の象嵌とは違った個性が光っています。黒い背景部分を切り抜き、透かし模様が浮かび上がる斬新なデザインは、軽くて使い手にやさしい中嶋さんのオリジナル作品。また、素材にステンレスを使用し、若い男性にも好まれるシャープで落ち着いたデザインに指輪など、従来の象嵌にはなかった新しい形を提案しています。



2016年 匠夢フェスタ会場にて

商品は、ネット通販のほか、国内外の多くのデパートで実演販売しています。「中嶋さんの作った象嵌がほしい」と、出張販売に訪れるたびに足を運んでくれる常連客も多く、年間を通じて作品づくりに追われています。

伝統工芸である象嵌をもっと身近に感じてもらえたら、との思いから京都の店舗では体験教室を実施。修学旅行生などにも好評で、中嶋象嵌の象嵌体験教室に参加した学生が大人になり、「こんなデザインの象嵌がほしい」と再来店されたこともあったとのこと。

中嶋さんは「これからも伝統を大切にしながら、どんな人にも気軽に使ってもらえるような象嵌を作っていけたら」と語っていました。